

「どの民族にも祖国はあるが、我々にあるのはロシアだ」

A・キセリヨフ（訳・渡辺雅司）



ロシアは唯一無二の存在である。

フェドトフはロシアの歴史的道の独自性を解明し、ロシアの相貌を描き出し、世界史におけるロシアの使命を見抜こうとした。

『新たな偶像』という著作で、彼は書く。

「われわれは解明することを声高に迫るロシアという謎の前に立たされている。そしてロシア・インテリゲンチヤにはロシアの運命の研究と解明という重い債務がのしかかっている」と。

フェドトフは自身相応の債務を払い、歴史的現実からみた時代ごとのロシアの発達という広範な問題領域について多くの仕事を残したのだった。と同時に彼の研究は内的一貫性を備えていた。学者の創造的模索は祖国の歴史の独自性を分析し、それに固有の「類的特性」をあぶり出し、矛盾に満ちたロシアの発展の奥深い淵源、原因の本質に迫るといふ主要目的に向けられていたからである。

ロシアの初期キリスト教、正教の独自の特

徴、ロシア民族の民族性の特徴、権力、社会、教会という三者の関係の特性、ロシアと西洋、東洋との相互関係に関する彼の書物や論文、さらには多様かつ重要な学問的テーマに関する著作はその幅の広さ、現実感覚、視座、評価、結論、総括の独創性で、驚くべきものである。

フェドトフは哲学と歴史を一つにまとめ上げた先駆者のひとりである。彼の著作は歴史の哲学的理解、歴史に対する哲学的関係、つまりは現代というものを歴史・哲学的に理解する好例だと言ってよい。

フェドトフはロシアをキリスト教思想家の目で眺める。彼は正教ロシアに理想を求めたのである。ロシアこそは彼の思い、情熱、憂い、希望の向かう先であった。

フェドトフは彼の時代の定説といつてよいロシア史の時代区分、すなわち古代ルーシ、モスクワ国家、帝国ロシアという時代分けに

従った。そして各時代に彼は独創的かつ多くの点で独自の特性を与えたのであった。

二つのテーマがフェドトフには特に關心があった。

第一のテーマとはロシアの宗教生活におけるラスコールの淵源と原因である。ほかでならぬ世界観、つまり人間や全体として見た社会の「精神」こそが発展の「類的特性」と独自性を決定づけると考える思想家にしてみればそれは当然のことであった。宗教生活の一体性の喪失は社会を内乱へと運命づけるものだった。

フェドトフの創作の第二の特徴は、ロシアと西欧の相互関係の研究、西欧がロシアに与えた文化的、イデオロギー的影響、相応の類型を形成する上で社会経済的、社会政治的諸関係の果たした役割、さらにはロシア人、とりわけインテリゲンチア、貴族、ブルジョアジーに代表される人格の形成と発達にみられる西欧の役割が挙げられる。

フェドトフは強調する。古代ルーシは「東洋と西洋という二つの文化世界の周縁」で形

成された。若い国家はすでに成熟した文明の影響下に不可避免的に置かれ、そこで独自性を発揮するには若い国家は「二つの戦線」つまり反「カトリック」と反「異教」という戦線での戦いを余儀なくされたのだった。

これに加えて古代ルーシの生成の特徴は多民族性であった。古代ルーシの領土内ではスラブ人はバルト人、フィン・ウゴル人、イラン人等々の民族と共生していた。しかもスラブ諸民族とその隣国との間には明確な国境というものは存在しなかった。

「新たな領土を徐々に獲得していくうえで、土着の種族との混血が容易に進んだ。先史時代からこれ等の種族はとだえることなく相互に影響し合い、そのことは言語、慣習、人類学的諸類型に反映された」とフェドトフは書く。

当然のことながら、各民族は国家、社会、習俗、文化の形成に特色を与え、形成途上の古代ルーシ民族の相貌を刻み込んだのだった。古代ルーシの最初の「多民族性」はその後の発展に影響を与え、現代語風に言えば、

多民族性をその後のロシアの国家制度の鮮明かつ際立った特徴へと変え、その根本に異民族への寛容さ、他民族との互恵的な絆の必要性を据えたのであった。

フェドトフはスラブ諸族の宗教信仰を語るにあたって、ロシアの宗教性の中心となつた母なる大地への崇拜を指摘する。スラブ人にとつて、「生きていくかぎり食を与え、死後は安らぎを与えてくれる母としての大地はやさしさと慈悲の具現化である」。キリスト教受容以前のもう一つの特性は、「生々しさと現実性にあふれた一族の崇拜、つまり一族はその宗教的重要性を受け入れない家族よりも重要である」。

だからこそ「社会関係全体、人々の間の相互関係全般が血のつながった姻戚関係のレベルまで高められるのだ。このことはロシア人の社会倫理を理解するうえで、きわめて大きな意味を持つ」。

世界（共同体）はこの姻戚関係によつて人間関係の温かさ、古来からの風習を吸収し、また故人の追善供養がのちに教会の礼拝で

重要な位置を占めることになる。祖先崇拜が今日まで続くほどのしつかりと根を張った現象となるであろう。このことを知ろうと思つたら、復活祭に自分の両親や親せきの墓もうでをする何千という人々の姿を見るだけで十分だろう。この伝統はソビエト時代にも途切れることがなかった。教会には行かないが、復活祭の日曜日は故人の追善に大切にささげられてきたのだった。

フェドトフはこう書く。「祖先から人は生まれ、そしてまた彼らのもとへ、母なる大地の懐へと帰っていく。地上の生活でその人の存在を決定づけてくれるのは先祖、つまり生きている間は願ひによって、故人となつてからは伝統という形で。個人の自由や願望など入り込む余地はほとんど残されてはいない。個人の重要性、その人自身の進むべき道、使命や権利といったものの自覚はロシアの地ではゆっくりと発達を遂げたのであつて、異教時代、キリスト教時代を問わず、遅ればせにやってきたのだった。この現象にこそ、ロシアの集団主義の実に深い宗教的根源が潜んでいるのである」。

古代ルーシ国家はその大きさから言つて多くのヨーロッパ国家とは比較にならない広大な空間に形成された。この場合東スラブの大地に散らばつた数多くの種族をまとめ上げねばならないという問題がはるかに尖锐なものとしてたちはだかつた。歴史は二つの大きな統合方法を知っている。剣と信仰である。古代ルーシで剣を助けることになつたのはキリスト教であつた。それは多くの点で種族内部、種族間の紛争をおさめ、巨大な国家を比較的平和に形成するための条件を生み出したのである。

フェドトフの定義によると、キリスト教の受容は「ロシアの運命における正教上の不動のできごとだった」。キリスト教は普遍的な理想、道徳規範、生活設計や生の意味そのものを理解する根拠という形で、統合原理をもたらしたのである。それはキリスト教信者たちの特別の公同意識を形成した。善と悪の観念、権力、家族、隣人、異民族に対する態度も含めたキリスト者の格別な内面世界を構築したのである。

キリスト教は、忍耐力、寛容性、試練に打ち勝つ心、誘惑の克服、利己主義の抑制、自分自身の家庭上、仕事上、社会上の義務の遂行、高潔な義務感といったものを人間に植えつけたのだった。フェドトフによるとロシアはほとんど教会と一体となつており、彼にとつては教会は「聖なるルーシへの扉」であり、聖ソフィア寺院の丸屋根は「ロシアの永遠のシンボル」だった。キリスト教の受容とともに、多民族からなるルーシ統一の意識がはじまつた。まさにキリスト教こそが、世界史における自身の使命へ向かつて東方、西方の「誘惑」を克服する力をルーシに与えたのである。

ルーシの受洗は、複雑で巨大な学問的テーマである。キリスト教はもっぱらビザンチンからやってきたとする視点が長いこと支配的だった。ビザンチンは宗教生活の儀礼的、神秘的、禁欲的源泉を受け継ぐことで、古典ギリシヤ神学の直接の継承者である。ビザンチンの影響はギリシヤの修道院からひろまつていく。「修道院はロシア人にとってほど

の時代にも禁欲生活の学校であった」。モンゴル侵入以前の時代にあつて、ロシアの宗教文化に顕著な影響を与えた三人の人物を挙げてゐる。クリメント・スモリヤーチチ、イラリオン・キエフキー、キリール・ツーロフスキーである。彼らこそはルーシにおけるビザンチン宗教思想の輝かしい代表者であり、説教、私書、異教徒のキリスト教改宗への配慮で名をはせたのだった。

しかしながら古代ルーシの最大の神学者となると、他の研究者にならつて、フェドトフはイラリオン・キエフスキーを挙げる。イラリオンにとつて特筆すべきなのは、単に個人個人の魂ではなく、民族の運命への祈りであつた。フェドトフは考える。古代ルーシ、「抽象的な思考ではかくも劣つていた古代ルーシが古代の年代記が雄弁に物語るように歴史的思考には極めて富んでいた」と。

民族の宗教的理想は聖者たちの中に具体的に表れる。形成途上にあつた宗教性のタイプの特色は鋭い共苦の情だつた。フェドトフは言う。「ロシア人は哀れみから聖者を創造し、哀れみこそは宗教生活の最も深い根であ

る」と表明したのだった。最初に聖者とし列聖されたのが、「その自己犠牲的な死をもつてキリストになつた」ボリスとグレーブ公だつたのは偶然ではない。

その後、歴史家たちは古代ルーシへのキリスト教の伝播の別のルートつまりブルガリア、モラビア、クロアチア、ローマというルートを挙げるようになった。今日の歴史学の文献では古代ルーシの地におけるキリスト教普及の問題へのアプローチを変えるべきだとの提案までなされている。古代ロシアのキリスト教の様々な特色の奥に当時のキエフ・ルーシ、東方、西方に存在した様々なキリスト教共同体の利害があつたことを見なくてはならない。

キリスト教が古い異教信仰を徹底的に排斥したことはどこにもなかつたということも重要だろう。それどころかそうした異教信仰があれこれの民族のキリスト教の形態に特別の刻印を押し、様々なバリエーションに特色を与えたのだった。したがつてスラブ人の生活習俗が持つ一族原理がキリスト教文

化と合体し、キリスト教によつて完全に排斥されることはなかつたと書くフェドトフには同意せざるを得ない。

これについては現代の歴史家たちの研究も物語っている。ルーシの教会は民族の伝統を捨てよとは要求しなかつた。なぜなら魂の救済はただ儀式を守ればよいということではなく、善き行いによつてこそ保障されると考えられたからである。かくてルーシのキリスト教は異教信仰に対する寛容さを特徴とし、異教信仰はそれ自体変形を遂げながら、民衆の伝統的信仰と新しい宗教の絆を強めることによつて、キリスト教の中に浸透していったのだった。

例えば歴史家たちはこう指摘する。生神女崇拜は古代ルーシ社会には特徴的だった。何を隠そう、それは古代の農耕崇拜にまでさかのぼり、そこでは母なる潤った大地こそ最も大事なものであり、だからこそルーシでは多くの寺院が生神女にささげられたのだった。かくてヤロスラフの時代、コンスタンチノープルの影響を受けて聖ソフィア、神なる叡知という名の大寺院が建立されだしたとき、ル

ーシではギリシャ語のソフィアが「キリストの叡知」だとは誰も思わなかったという。この地ではそもそもソフィアとは女性ととらえられ、生神女と同一視されたのだった。それゆえ西欧ではルーシの教会が厳しく批判にさらされたのも偶然ではない。わけてもクラクフの司教マタイがクレルフのベルナルに宛てた親書にはこう書かれていたのだった。ルーシの連中はローマにも、ギリシャにも従おうとはせず、両者と訣別し、この民は「両者の秘蹟（儀式）に従おうとはしなかった」。特筆すべきはタタールの軛のはるか以前に、西欧の目にはルーシは「別世界」と映っていたことである。

第一段階ではキリスト教は古代ルーシの支配階層の信仰であった。しかしながらキリスト教を通して「上層」の文化が徐々に民衆に接ぎ木されていき、民衆を変化させ、こうして「上層」が「下層」と有機的に結合したのだった。国家、社会、文化の独特の一体性が根付いていったのである。フェドトフはキリスト教の受容とともに生まれた文化の中

にルーシが東と西の間をどんなに揺れ動いても「精神の磁針」が立ち返っていく磁極を見たのだった。

フェドトフは考えた。ルーシは古典的ギリシャ、すなわち「ヘレニズム精神」の後継者となり、西欧はローマの後継者となった。ここからロシアと西欧の間に起こった諸矛盾が出てくる。そうした矛盾は多くの場合、宗教的、精神的領域で起こったものである。

古代ルーシは自分流にキリスト教を「読み込み」そこに新たな要素を持ち込み、かくしてフェドトフはこう書く。キエフ時代に我々は古典古代的伝統と決別したが、かといって独自の伝統を獲得するということまでは至らなかったのだと。同時に彼はこうも指摘する。「正教における民族思想の意味を解きほぐす役割はギリシャ教会ではなく、ルーシ教会に託されたのだったと。古代ルーシは神を論ずることはできなかつたといふべきか。しかし古代ルーシの現実全般、歴史全般は民族的な肉と精神が受容されたことを明かしている……」。

古代ルーシにとって特徴的な二重信仰、つ

まりキリスト教的観念と異教的見方の共存を研究者たちは指摘する。フェドトフは考えた。中心的都市や街道筋から遠く離れた農村地帯では、少なくとも少数の地方では前モンゴル時代を通じて異教が存続した。ルーシ教会史の専門家は、ルーシが最終的にキリスト教に改宗したのはほぼ一五世紀のことだとする。そしてこのことはその後の写本で今日まで伝えられる多くの説教も認めている。それらの説教は二重信仰の批判に宛てられたものである。一例をあげれば、一二世紀の半ばにノブゴロド主教は呪術信仰は許されないと女たちにわざわざ断っているのだ。にもかかわらず農村部ではまじない師が一九世紀、いや二〇世紀になってもごく日常的な存在だったのである。

個人の運命を決する血族関係は強固なものだった。「リーチノスチは自身を不断の鎖の一環と感じており、自分の意志、例えば自由意志であろうとも、そこから抜け出したいとは思わなかつた」とフェドトフは書く。『それが運命というもの』と有名なロシアの格言は言う。ロシアの民話や英雄叙事詩は運命の

絶大な力の例に満ちている」。ロシアの異教の本質をフェドトフは神々への信仰ではなく、自然、その根源力と現象への崇拜、血族信仰、根強い運命信仰に見た。ここからロシア人の民族的な性格の一つの特徴である運命論が出てくるのである。

数多くの説教集が宴会の暴飲や異教的性格を暴くことにあてられている。フェドトフはこう指摘する。民衆の祝祭の持つ「粗暴などんちゃん騒ぎ」は二〇世紀まで残っていた。と同時にロシア魂の異教的古層は民衆が「自然というものを、純粹かつ神聖なもの、人間の歴史や文化のいかなる罪業にも関わりのないもの」と考えていたことからわかる。日常生活において幾世紀にもわたる自分たちの経験で満足していた、伝統的な文化環境は、理論的叡知の必要性を感じる事がなかった。

ルーシではキリスト教は西欧のように理論的レベルのものではなく異教文化と共存するという現実的レベルのものだったのだ。キリスト教による異教の排除ではなく、両者

の同化のプロセスが進行し、そのことが一体なゼルーシが他のキリスト教世界と一向に融合しなかったかの原因の一つであった。

一方ルーシでは民衆の伝統的信仰に浸透されていたキリスト教が民衆の血肉となり、種族間の対立を克服し、幾度となく精神的、宗教的のみならず国家的な統一への傾向を強めることになった民族的自己意識を決定づけ出したのだった。ロシアの国家制度はロシアの正教文化と融合し、「新たな社会史的、政治的現実の総合的生成が起こり、それは総じて独創的かつ独自のロシアの文化史体系の形成として定義することができよう。この体系の特徴は、ここでは統一された正教文化に同じく統一された国家政治的核が一致していたことである」。

かくしてルーシへのキリスト教の浸透の経路という問題は、より一層複雑な学問的問題、すなわち改宗者たちがどのように信仰を受け入れ、形成途上の精神生活や教会の特性を構築する上でどれほど積極的な影響を与えたかを研究する事と固く結びあっている。

大事なのはどの地からキリスト教がやってきたかを知るとどまらず、ルーシが「呼吸」し始めた創造的起源を明らかにする事でもあるのだ。すでにその歴史の早期の段階にあって、ルーシは新たな文化、この場合キリスト教文化、を受容し、これを自らの世界感覚に適合させ、自らの伝統的意識に新たなものを創り入れるという驚くべき資質を示したことである。特徴的なのは、ルーシにおけるキリスト教の普及が比較的平和裏に進んだことである。「ルーシの地をキリストは神聖なる秩序を剣によって植えつけようとする強大な王としてではなく、恭順を身をもって示すぼろをまとった姿で歩き回ったことだった」。ルーシが置かれていたかなり複雑な地理的、対外的条件やその土地の相対的貧しさはキリスト教的恭順を身をもって表し、この特質をもってルーシ民族にとって極めて特徴的な共苦としての愛という板挟みの感情の源となっていたのである。

古代ルーシのイコンさへもが、自分たちのものとなった聖者に現世的な表情を与えるほどだった。のちに最大のイコン画家になる

アンドレイ・ルブリョーフは彼以前のキリスト教絵画の決まりとは異なったキリストを書いたのである。アンドレイ・ルブリョーフの解釈によれば、それまで規範となっていた厳格なビザンチン様式はいささか抽象的性格を持っており、それは古代異教の家霊にも似たものをキリストに与えたのだった。ルブリョーフのキリストは一目で普通人ではあるがこの世界のものではないとわかる特徴を分与されていた。ルブリョーフの偉大なアイコン「**救世主**」は多くの点で忘れえぬ最初のロシアの描写であった」。

キエフ・ルーシ、続くモスクワ・ルーシはビザンチンの東方正教から文字と精神を借用し、時代とともに独創的な文化の型を創出した。それは内面的靈性と自然、おのが民族との一体感を持った人間化された文化の型であった。「ルーシの文化はそもそも**宗教的**で、**自分独自の**ことば、**独自の運命感**というものを身に着けていた」。

フェドトフの見解によると、ロシア正教の特性の一つは「**ギリシヤ教会は聖者たる信徒を知らなかった事、そこから聖者とされるル**

ーシの諸侯の中には民族生活の聖物と緊密に結びついた新たな聖性といったものが開花していったということだろう。この聖物のためとあらば、**禁欲的な偉業の聖性**までが、**まれにみる大胆さで犠牲に供されたのだ**た……」。

今日の歴史家たちはこう想定する。キリスト教がルーシに浸透していく初期の段階にあつて主導的役割を果たしたのはキリール・メトジオスの伝統、すなわち正教の特殊ロシア的読み込みの特性の一つとなつた、喜ばしき信仰受容に格別の意義を認める伝統である。そこにこそフェドトフは国家の中におけるルーシ教会の自立性、世俗権力からの独立性の根幹のひとつを見たのであつた。そればかりか古代ルーシでは**権力の教会化**（権力者が信徒になること）**首尾よく進行し、**教会が**道徳的、精神的に権力を指導**することになつたのである。

フェドトフはキエフ・ルーシを「**古代ルーシの最高度の文化発展**」の時代とし、それは国家ではなく、**文化的、宗教的、王朝的に結**

びつてはいるが、それぞれ独立した諸国家の機構に過ぎないことを強調する。実際九世紀、一〇世紀のキエフ・ルーシは様々な国土つまり公国を統合し、キエフ公がその頂点とされ、その後「**大公**」の称号を得たのだった。スラブの各都市では、ヴェーチェ、すなわち市民の全体会議が機能し、この会議の意見は公の意志よりも強いこともままあつたのである。一〇〜一二世紀の多くの古代ルーシの町の住民は誰が公として君臨するかをしばしば自分たちで決定したのにもそれなりの理由があつた。

キエフ公と地方の諸侯との間では独自の条約が結ばれ、そこでは第一に、キエフ公が連合諸侯の領地で年貢を徴収する権利（ポリュジエ）、第二に彼の支配下の国土を擁護する義務、第三に地方諸侯にはキエフ公が異国に遠征する場合には予備役の軍隊を徴兵する義務といったことが取り決められていたのである。そこでは都市の自治と部族の自治との関係は何ら取り決めがなかつた。

フェドトフはこう指摘する。当時のルーシの統一は公というよりも**府主教**によって維

持される事のほうが強かった。なぜなら公の権力下にあったのはキエフとそれに隣接する地方だけだったからだ。これにたいし府主教は諸公よりもはるかに大きな力を持っていたが「その影響力を政治領域にまで広げようとはしなかった」。福音書の、カエサル

のものはカエサルに、神のものは神にといい原則通りに生きていたのである。諸侯たちはキリスト者としての恭順をもって司祭の教えを受け入れたのだった。この点では公と言えども正教会の体内で生きる他のキリスト教徒と同等であり、正教会はルーシの民族意識を形成する上での好条件を創出したのだった。しかしながらルーシの誰一人として、「自分の国をキリスト教世界の中心だとか、最上の真の信仰のくにだとか、もつとも大切な大いなる聖者の生まれた土地だとか考えるものはいなかった。ギリシャの母なる教会とは、ルーシは子としての尊崇の念で結ばれていたのである」。

フェドトフはこう指摘する。キエフ時代のルーシはその歴史上かつてないほど政治的自由に近かった。キエフの年代記作者は公然

と公の罪業や悪徳を暴き、「公に対する民の反乱は公に罰を与えよという神慮の表れとみなすことすらあったのだ」。ビザンチンとちがって、国家が教会を支配することはなく、教会が宗教問題、社会問題を解決する広範な司法権を持っていたのである。

国家権力が儀礼的性格をそなえたビザンチン主義はルーシには根づかなかった。「古代ルーシの公は権力の絶対性を体现するものではなかった。公は大貴族や親衛隊、さらにはヴェーチェとも権力を分有したのであった」とフェドトフは指摘する。このことは、東方は文化面でも国家機構でもルーシを魅惑することはできなかったのである。

大多数の農耕民、つまり古代ルーシの主たる住民は、自由な存在であった。これについては、例えばノブゴロドを例にとると、白樺文書が物語っており、それによるとノブゴロドの農民はいまだ完全には農奴化されていなかったのである。

歴史家たちの観察によると、自由農民を結集していた「御料地」はずっと後期（一五世紀）になっても自由共同体民を擁する前封建

的所有制度を残していたのだった。一一〜一二世紀の古代ルーシの社会経済制度に対する私有（封建的）経営の影響は、いまだかなり弱く、ルーシ国家の形成プロセスに民衆が積極的に参画したことは共同体の自治制度によっても裏付けられている。共同体は極端な階層分化を容認せず、共同体の社会正義感覚はルーシの道徳的砦となったのだった。

土地所有者としての封建領主すら、とりわけ輪作をしたり、共同放牧や入会林、等々を利用する場合には（そもそも彼等が従っていた）共同体的土地利用という強固な伝統が認められていった。

フェドトフは古代ルーシをいまだ明確な形式へと結晶化しなかった国家、社会ととらえたのだった。それらは可動的で、不安定で、揺らぎがちなものだった。くつきりとした線は現れてはいたが、核心は輪郭のままだった。フェドトフが古代ルーシを表情力にあふれ、見目麗しきうら若き乙女にたとえたのも偶然ではない。この乙女は容易に解けぬ神祕の謎であった。乙女はおし黙っている。おそらく彼女が沈黙していたのは古典的伝統とは



縁を切りはしたが自分本来の伝統はいまだ身に着けていなかったからだろう。またおそらくはモンゴルの征服者とルーシの従士団との戦闘の轟音が彼女の言葉をかき消し、かくて麗しのルーシは悲しみの沈黙の中で氷ついてしまったのかもしれない。

キエフ・ルーシはモンゴル・タタールの来襲による激的な攻撃とカトリック系ポーランド、異教的リトアニアの圧力を受けて滅びたのだった。ルーシ住民の大多数は鬱蒼とした森と沼沢地帯のぬかるみによって征服者から守られた北東ルーシをめざしたのだった。そして自然の障壁に守られたこの地でモスクワ・ルーシが形成されていく。時とともに国家としての自立と政治、社会経済、文化的発達の復興という課題を解決することができた中央集権国家モスクワ・ルーシである。フェドトフはこう考えた。モンゴルによる支配は、ルーシをキプチャク汗国という大帝国の一部となし、そのことはルーシの政治的外貌、東洋的専制タイプの権力の形成となって現れた。こうした主張からすると彼はユー

ラシア主義者に近づいたといえよう。ユーラシア主義の論客の一人であるトルベルツコイは一九二五年にこう書いた。「モスクワ国家はタタールの軛のおかげで生まれた……ロシアのツァーリはモンゴルの汗の後継者となったのだ。その結果として「タタールの軛」の打倒はタタールの汗が正教を奉じるツァーリにとって代わられ、それまでの汗の本営がモスクワに移ることになったのである」。

ユーラシア主義者は西欧主義を断固として否定する一方、論敵であったスラブ主義をも同時に排したのだった。「ヨーロッパ文明は普遍人類的文化ではない」とトルベルツコイは書く―それは特定の民族学上の個体、つまりロマンスゲルマン人の文化に過ぎないのだ。ロマンスゲルマン人にとってはその文化はきつても切れないものなのだ」。

ヨーロッパ文化は没落に向かっており、解体され、袋小路に陥っているものと評されたのだった。多くの点でロシアはチンギス汗の帝国の後継者であり、東洋と西洋の中間的位置を占めるものだった。しかしながらロシアにとって際立っているのはなんと

っても「ステップの持つ威力」の感覚であり、「海洋としての大陸」という独特な感覚だった。ユーラシア主義者によると、「タタールの軛」なしにはロシアはあり得なかった。「神罰」でありながら「タタールの軛」は民族の生活習慣、生活様式、心理に、さらには社会機構、国家制度に影響をあたえ、それと同時に「民族的創造力の純度を濁らすこともなかった」のである。

とはいえロシア国家の創設者はキエフの諸公ではなく、またモスクワのツァーリはモンゴルの汗の後継者だったのだ。と同時に信仰心あついキリスト教徒特有の精神的紐帯を確保してくれた正教のおかげでタタールの汗がロシアの国家制度となったのである。精神生活における教会の役割を絶対視することによってユーラシア主義者は社会生活における国家の役割をも絶対視することになったのである。

フェドトフの評価はそこまで断定的ではなかった。彼はモスクワ国家の錯綜性、多面性に注目した。彼に言わせるとモスクワ国家

とはルーシに対するモンゴルとビザンチンの影響の融合だったのだ。これと関連して彼は書く。モスクワの君主は征服者としての汗とビザンチン皇帝の継承者だったのだ。……相異なる思想と権力手段のこうした融合こそが、歴史上唯一とは言わないまでもまれにみる専制政治を生んだのだ。

北東ルーシは本来敵対的な包囲網に囲まれながら、またぞろ西洋（リトアニア）と東洋（タタール汗）の間で選択を迫られたのだ。フェドトフの見るところでは、歴史の振り子は東へと振れ、モスクワは東洋タイプの国家に変容していったのである。

ユーラシア主義者とは違って、フェドトフは「**選択の自由**」を、歴史とルーシ自体にゆだねたのである。

フェドトフはあらためて強調する。ルーシは西と東の両文明の「**狭間**」にあつて、自身の発展のベクトルをいずれかの方向に選択するしか道がなかったのだと。ここから「**幼年時代**」を、成熟した、攻撃的な両隣邦との相互関係の中で送らざるをえなかった国家の境遇の複雑さ、悲劇性が生起するのである。

ルーシは単に生きるだけでなく、生き抜かなければならなかったのであり、選択の自由という問題は限定的だったということである。つまりルーシは歴史状況が命じたままの道を進んだのだ。

ユーラシア主義者に対しては、同時代人たち、とりわけイワン・イリンが論拠だつて鋭く批判の刃を向けた。事実ロシア国家の復興はキプチャク汗国のおかげではなく、諸汗並びに封建的な群雄割拠との幾世紀にもわたる狂おしい闘いの中で進んだのだから。「**モンゴルIIタタールの軛**」からの歴史的出口は強大な中央集権国家の形成を通して見出されるのである。

専制権力の必要性は、第一に異国の軛、絶え間ない外敵の脅威との闘いからくる極度の緊張によって、第二にのちのことになるが経済的課題、すなわち「**国家が社会的分業のプロセスを強化する、つまり農業から産業を腑分けするプロセスによって余儀なくされたのだ**」たのだ。なぜなら中世ロシア社会の伝統的特性は、生産がもつぱら農業にたよつてい

たこと、農業人口が不足していたこと、手工業生産の立ち遅れ、つまりは将来見込まれる産業発展の分野でのたえざる労働力不足にあったからである」。

ここから西欧よりはるかに強力な経済分野に対するロシア国家の制御作用が出てくる。ここでは地理的要因もそれなりの役割を果たした。遠心的な動向に有利に働く広大な領土は強力な中央集権的権力によつてのみ「**束ねる**」ことができたのだ。

クリュチエフスキもこう考えていた。ロシアに特有の領土の広大さ、民族的雑多さ、広範な移動のもとでは、絶え間なく増大する民族と領土の混合を一つにまとめ上げるこゝとができるいわゆる締め具をどうするかという問題が出てくる。彼によると、締め具の役割は政治的には高度の中央集権的な権力に、軍事面では強大な軍隊に、行政面ではいち早く成長を遂げてしまった強力な官僚制に、思想面ではキリスト教の持つ統合原理、経済面では農奴制の堅固さに割り当てられた。

しかしながらフェドトフも正当に評価すべきであろう。モスクワ国家の専制的原理を評価するにあたって「モンゴル・タタールの軛」の影響を主要なものとしなしたとはいえず、モスクワ国家の形成と発展のそれ以外の特性の評価にあたってはフェドトフはユーラシア主義者の見解とはかけ離れていた。それどころかフェドトフの仕事のメイン・モチーフはキエフ・ルーシとモスクワ・ルーシの間、とりわけ文化面における両者の継承性であった。彼にしてみれば北東ルーシはキエフ・ルーシのユニークかつ唯一無二の文化の後継者、とりわけロシアの国民性の形成にいくも有益な影響を与えた宗教分野における後継者だったのである。(次号へ続く)

#### 補記 (編集部による)

●原題 Глава 2. <У всякого народа есть родина, но только у нас - Россия> 第二章 「どの民族にも祖国はあるが、我々にあるのはロシアだ」(原文ロシア語)。本テキストは以下のキセリョフの著作の中の「靈感を受けたロシア」の「第二部」に当たる。

#### ●出典

Киселев А.Ф. - Увидеть Россию заново. (Многоликая Россия. - Одухотворенная Россия).

/ Вступ. ст. Ерина С./ М. Дрофа. 2010 г.

А.Ф. Киセリョф 『ロシア再見』(多面的なロシア)「靈感を受けたロシア」の二著作を収録(序文エーシン)、モスクワ「ドロフアー(野雁)」社、五九二頁、二〇一〇年刊。

本書と著者キセリョフについては、「水源地」第三号所収の「哲学者の歌う心」末尾の「補記」を参照されたい。

